研究ノート

『分門纂類唐宋時賢千家詩選』所収の『千家詩』七言絶句

三野豊浩

提要

在中国，《千家诗》是家喻户晓的一本诗歌选集，从古到今一直流传不朽。它一共辑录了九十四首唐宋七言绝句，其中四十八首见于宋末元初成书的《分门纂类唐宋时贤千家诗选》（这里，简称《分门》）。本稿把这些作品按着在《分门》里的排列来介绍，并加以简单的分析。一般来说，《分门》被认为《千家诗》的来源，但是它并不包括《千家诗》的全部作品。《分门》没有辑录的四十六首七言绝句很可能有其他的来源。最后谈谈以后的计划。除了《分门》以外，在宋末元初成书的唐宋诗歌选集还有《唐宋千家联珠诗格》。我认为，这本书可能是《千家诗》的另一个来源。我打算对它进行跟这次一样的调查。

关键词：《分门纂类唐宋时贤千家诗选》、《后村千家诗》、《千家诗》、七言绝句

はじめに

『分門纂類唐宋時賢千家詩選』は、南宋の終わりから元の初めの頃（宋末元初）に成立した漢詩選集である。

まず、このいかにも長たらしい書名から説明することにしたい。同書は、唐代および宋代の詩（主に五言と七言の絶句・律詩であるが、古詩や六言など若干の例外もある）を各種のテーマ別に「〇〇門」と分類し（分門）、それぞれの部門ごとに同類の詩を集め（纂類）、更にそれらを作者の時代によって「唐賢」「宋賢」「時賢」の三つに分類して収録したものである。「唐賢」は唐代の詩人たち、「宋賢」は北宋の詩人たち、そして「時賢」は撰者と同時代の南宋の詩人たちをさす（唐宋時賢）。「千家」はもとより実数ではなく、数多くの詩人の詩を集めた、ということを意味している。まさに読んで字のごとくの書

名というわけである。

同書は、一般に南宋後期の「江湖派」の重要詩人である劉克荘（一一八七～一二六九。字は潛夫、号は後村）の撰とされ、『後村千家詩』の通称で知られる。しかし実際には、出版者が勝手に当時の代表的な文人である劉克荘の名を冠した可能性が高い。明代に出た『唐詩選』が李攀龍の名を冠するのと、事情はほぼ同様である。したがって本稿では『後村千家詩』の通称を用いず、本来の書名の冒頭の二字をとって『分門』と略称することにしたい。ちなみに日本では、『分門』は十四世紀の南北朝の頃に伝来し、五山の僧侶たちの間で流行し、虎関師錬（？～一三四六）による注釈書も書かれている。[1]

さて、『分門』は一般に『千家詩』（通称『謝枋得千家詩』）の源流と考えられている。一例として、佐藤保氏はＮＨＫラジオテキスト『漢詩をよむ　中国のくらしのうた（春～夏）』（二〇一三）の中で次のように述べる。

『千家詩』は、南宋の劉克荘編『分門纂類唐宋時賢千家詩選』二十二巻が原本と伝えられているが、その後各種のテキストが編まれ、現在の通行本『千家詩』は唐・宋詩の著名な作品二百二十首あまりを、五言絶句・五言律詩・七言絶句・七言律詩に分けて収録する。本書は清朝初期に作られた『唐詩三百首』とともに、初心者向けの詩の書物として多くの注釈書が存在し、現在でも読み続けられている。[2]

こうした通説の通り、『分門』は果たして『千家詩』の源流と言い得るものなのか否か。本稿では、そのことを検証するべく、『千家詩』所収の作品のどれだけが『分門』に収録されているのかを確認することにした。ただし『千家詩』の収録作品すべて（七言絶句九十四首、七言律詩四十八首、五言絶句三十九首、五言律詩四十五首）を一度に確認するのは大変なので、ひとまず詩形を七言絶句に限定し、その『分門』における収録状況を確認することにする。

本稿における『分門』は、李更・陳新『分門纂類唐宋時賢千家詩選校證』（人民文学出版社、二〇〇二。以下、『校證』と略称）を底本とする。[3] その上で、必要に応じ劉玉才・住吉朋彦『合璧影印中日分蔵珍本・分門纂類唐宋時賢千家詩選』（北京大学出版社、二〇一四。以下、『合璧』と略称）を参照した。同書は中国の北京大学図書館所蔵の元代刊本と日本の慶應義塾大学斯道文庫所蔵の元代刊本をあわせた貴重な影印本である。

『千家詩』には各種の版本があるが、本稿では同書の原型に近い古いテキストとして『白話注解千家詩』（奥付は『千家詩注解』。江蘇広陵古籍刻印社影印、揚州古籍書店発行、一九九一。以下『注解』と略称）を基礎とした。

本稿は、まず『分門』所収の『千家詩』七言絶句を『分門』の収録順に配列し、同書の表記通りに掲載する。そしてこれに以下を付記した。

【詩題】詩題について、『分門』と『注解』および『全唐詩』『全宋詩』の間の異同を記した。

【作者】作者をごく簡単に紹介し、『分門』と『注解』および『全唐詩』『全宋詩』の間の異同を記した。なお、本稿では作者の真偽の問題には深く立ち入らない。

【詩句】詩句の表記について、『分門』と『注解』および『全唐詩』『全宋詩』の間の異同を記した。異同のある箇所はゴシック体で示した。

【大意】詩の大意を記した。ただし、細部の異同などの事情により、適当に表現をぼかした場合がある。

この他、以下の点をあらかじめお断りしておく。

一、『校證』は版本の問題により、『分門』を第一、第二、第三の三つの部分に分けて掲載している。本稿はこの区分を踏襲する。

一、『分門』の原書は同じ詩題が続く場合、それらをすべて「又」と略記しているが、本稿ではすべて本来の詩題に修正した。

一、『分門』の原書に「唐賢」「宋賢」「時賢」の表示が抜けている場合は、（　）に入れて補った。

一、『分門』という書物の概要を知っていただくため、『千家詩』の詩が収録されていない巻についても、その門名と概要を記した。ただし各門の細目は割愛した。

『分門』所収の『千家詩』七言絶句

第一部分　前集　巻一～巻二十

『分門』の最も主要な部分。最初はこれだけで出版され、その後徐々に続編が刊行されて行ったと推測される。(4)『合璧』は巻十六と巻十七のみ失収。

巻一　時令門　季節の詩

主な細目は「春」。賈島、杜甫、韓愈、王令、曹豳、楊万里の詩が見える。

〔唐賢〕三月三十日　賈島（かとう）

三月正当三十日　三月　正に三十日に当たり
風光別我苦吟身　風光　我が苦吟の身に別る
共君今夜不須睡　君と共に　今夜　睡（ねむ）るを須（もち）いざらん
未到暁鐘猶是春　未だ暁鐘に到（いた）らざれば　猶お是れ春なり

【詩題】『注解』「三月晦日送春」。『全唐詩』「三月晦日贈劉評

事」。

【作者】賈島、字は浪仙。中唐の詩人。後出の韓愈の弟子で、「推敲」と「苦吟」で知られる。

【大意】春の最後の日の感慨をうたう。今日は春の終わりの三月三十日。春は苦吟する私に別れを告げて去りゆこうとしている。あなたと一緒に、今夜は眠らずに過ごすことにしよう。明け方の鐘が鳴らないうちは、まだ春なのだから。

〔唐賢〕春暮　杜甫

腸断春江欲尽頭　腸断す　春江　尽きんと欲する頭
杖藜徐歩立芳洲　杖藜　徐ろに歩み　芳洲に立つ
顛狂柳絮随風去　顛狂なる柳絮　風に随いて去り
軽薄桃花逐水流　軽薄なる桃花　水を逐いて流る

【詩題】『注解』「慢興」。『全唐詩』「絶句漫興九首」其五。

【作者】杜甫、字は子美。盛唐の代表的な詩人。

【詩句】第三句「去」、『注解』「舞」。

【大意】春の終わりの情景をうたう。春が終わろうとする川のほとり、はらわたも断ち切れそうな思い。アカザの杖をついてゆっくりと歩き、川の中洲に立ってみれば、物狂おしい柳絮は風に吹かれて飛び去り、軽はずみな桃の花びらは川の水に乗って流れて行く。

〔唐賢〕春暮　韓昌黎

草木知春不久帰　草木　春の久しからずして帰るを知り
百般紅紫鬬芳菲　百般の紅紫　芳菲を鬬わす
楊花榆莢無才思　楊花　榆莢　才思無く
惟解漫天作雪飛　惟だ解く漫天に雪と作りて飛ぶのみ

【詩題】『注解』「晩春」。『全唐詩』「遊城南十六首」其三「晩春」。

【作者】韓愈、字は退之、通称は昌黎先生。中唐の代表的な詩人。

【詩句】第一句「木」、『全唐詩』「樹」。

【大意】春の終わりの情景をうたう。草や木は春が遠からず帰って行くことを知り、今のうちにと、さまざまな色に咲き誇り、かぐわしさを競い合っている。ただ柳絮とニレのさやだけはこれといった才能もなく、空一面に白い雪のように舞うことができるだけ。

〔宋賢〕春暮　王逢原

三月残花落更開　三月　残花　落ちて更に開き
小簷日日燕飛来　小簷　日日　燕　飛び来たる
子規夜半猶啼血　子規　夜半　猶お啼きて血をはく

不信東風喚不回　　信ぜず　東風　喚ぶとも回らざるを

【詩題】『注解』「送春」。『全宋詩』「春晩二首」其二。
【作者】王令、字は逢原。北宋の詩人。後出の王安石の知遇を得るが、若くして世を去った。
【詩句】第三句「夜半」、『注解』「半夜」。
【大意】春の終わりの情景をうたう。春の終わりの三月、花は散り落ちてはまた開き、ささやかな我が家の軒先には毎日ツバメが飛んでくる。ホトトギスは真夜中に血を吐くような声で泣き叫び、春は呼んでも帰ってこないことを信じていないかのようだ。

〔時賢〕春暮　　曹豳

門外無人問落花　　門外　人の落花を問う無く
緑陰冉冉遍天涯　　緑陰　冉冉として天涯に遍し
林鶯啼到無声処　　林鶯　啼きて声無きに到る処
青草池辺独聴蛙　　青草の池辺に　独り蛙を聴く

【詩題】『注解』『全宋詩』「春暮」。
【作者】曹豳、字は西士、号は東畎。南宋の詩人。
【詩句】第四句「辺」、『注解』「塘」。
【大意】春の終わりの情景をうたう。家の門の外には散り落ちた花の消息をたずねる人もなく、緑の木陰は天の果てまでも続いている。林の中のウグイスの鳴き声が聞こえなくなり、青い草の茂る池のほとりで、ただ一人カエルの鳴き声を聴いている。

〔時賢〕傷春　　春を傷む　　楊誠斎

準擬今春楽事醲　　準擬す　今春　楽事の醲きを
依然枉却一東風　　依然として枉却す　一東風
年年不帯看花眼　　年年　帯びず　花を看るの眼
不是愁中即病中　　是れ愁中ならずんば　即ち病中

【詩題】『注解』「傷春」。『全宋詩』「暁登万花川谷看海棠二首」其二。
【作者】楊万里、字は廷秀、号は誠斎。南宋の代表的な詩人。『注解』「楊簡」。
【詩句】第一句「醲」、『注解』「濃」。第二句「然」、『全宋詩』「前」。第三句「眼」、『全宋詩』「福」。
【大意】過ぎ行く春を惜しむ心情をうたう。今年の春は楽しいことがたくさんあるだろうと思っていたのに、いつもと同じように春の楽しみをまるごと無駄にしてしまった。毎年毎年花を見て楽しむことができないのは、愁いに沈んでいるのでなければ、病の中だからである。

巻二　時令門　季節の詩

主な細目は「夏」「秋」「冬」。このうち「夏」に杜甫、高駢、黄庭堅、朱淑真、楊万里、戴復古の詩が見え、「秋」に杜牧、劉翰の詩が見える。

〔唐賢〕夏　杜甫

糝径楊花鋪白氈　径に糝する楊花　白氈を鋪き
点溪荷葉畳青銭　渓に点ずる荷葉　青銭を畳ぬ
竹根稚子無人見　竹根の稚子　人の見る無く
沙上鳧雛傍母眠　沙上の鳧雛　母に傍いて眠る

【詩題】『注解』「漫興」。『全唐詩』「絶句漫興九首」其七。
【作者】杜甫は既出。盛唐の代表的な詩人。
【詩句】第三句「竹」、『注解』「笋」。『全唐詩』「筍」。
【大意】谷川のほとりの情景。小道に散り落ちる柳絮は、白い毛氈を敷いたかのよう。谷川に点々としているハスの葉は、青い銭を重ねたかのよう。竹の根元のタケノコは人に見つかっておらず、砂の上のカモの雛は、母鳥に寄り添って眠っている。

〔唐賢〕夏　高駢

緑樹陰濃夏日長　緑樹　陰　濃く　夏日　長し
楼台倒影入池塘　楼台　影を倒にして　池塘に入る
水晶簾動微風起　水晶の簾　動き　微風　起こり
満架薔薇満院香　満架の薔薇　満院に香る

【詩題】『注解』「山居夏日」。『全唐詩』「山亭夏日」。
【作者】高駢、字は千里。晩唐の詩人。
【詩句】第三句「晶」、『全唐詩』「精」。第四句「満」、『注解』『全唐詩』「一」。
【大意】夏の情趣をうたう。緑の木々は影も濃く、夏の日は長い。楼台の影はさかさまになって池の水に映っている。かすかな風が吹いて来て水晶の簾を動かし、棚いっぱいのバラの花が庭いっぱいに香りを放つ。

〔〔宋賢〕〕夏　王荊公

四顧山光接水光　四顧すれば　山光　水光に接し
憑欄十里芰荷香　欄に憑れば　十里　芰荷　香る
清風明月無人管　清風　明月　人の管する無く
并作南窓一味涼　并せて作す　南窓　一味の涼

【詩題】『注解』「晩楼閑坐」。『全宋詩』「鄂州南楼書事四首」其一。

【作者】『分門』は王荊公（王安石）とするが、実際は黄庭堅。黄庭堅、字は魯直、号は山谷。北宋の代表的な詩人。蘇軾の門下で、「江西詩派」の開祖。

【詩句】第四句「并」、『全宋詩』「併」。「窓」、『注解』「来」、『全宋詩』「楼」。

【大意】楼上からの眺めをうたう。四方を眺め渡すと、山の景色が水の景色と一つに連なり、欄干によりかかると、十里四方からヒシとハスの香りがただよって来る。この清風と明月は誰も管理するものがなく、共に涼味を演出している。

〔宋賢〕夏　　朱淑真

竹揺清影罩幽窓　　竹　清影を揺らし　幽窓を罩め
両両時禽噪夕陽　　両両たる時禽　夕陽に噪ぐ
謝却海棠飛尽絮　　海棠を謝却し　絮を飛ばし尽くす
困人天気日初長　　人を困ぜしむる天気　日　初めて長し

【詩題】『注解』「即景」。『全宋詩』「清昼」。

【作者】朱淑真は北宋末～南宋初の女性詩人。『注解』「朱淑貞」。

【大意】けだるい初夏の情趣をうたう。竹の影は奥深い窓を覆い隠し、つがいの鳥が夕陽の中で鳴き騒いでいる。海棠の花は散り落ち、柳絮は飛び尽くした。眠気を催させる天気、日は長くなりはじめたばかり。

〔時賢〕初夏　　趙信庵

梅子留酸軟歯牙　　梅子　酸を留め　歯牙を軟らかにす
芭蕉分緑映窓紗　　芭蕉　緑を分かち　窓の紗に映ず
日高睡起無情思　　日　高く　睡りより起くれば　情思無し
閑看児童捉柳花　　閑に看る　児童の柳花を捉うるを

【詩題】『注解』「初夏睡起」。『全宋詩』「閑居初夏午睡起二絶句」其一。

【作者】『分門』は趙信庵とするが、実際は楊万里。楊万里は既出。南宋の代表的な詩人。『注解』「楊簡」。

【詩句】第一句「留」、『注解』「流」。「軟」、『注解』「濺」。第二句「映」、『注解』「上」、『全宋詩』「与」。第三句「高」、『注解』『全宋詩』「長」。

【大意】初夏の情趣をうたう。梅の実は口の中にすっぱさを残し、歯がやわらかくなったように感じる。芭蕉の葉は緑の色を窓のカーテンに映している。日は高く上り、眠りから起きてみれば、心に思うことは何もなく、子どもたちが柳絮をつかまえようとしているのをのんびりと眺めている。

〔時賢〕初夏　　戴石屏

乳鴨池塘水浅深　乳鴨の池塘　水　浅深
熟梅天気半晴陰　熟梅の天気　晴陰を半ばす
東園載酒西園醉　東園に酒を載せ　西園に醉い
摘尽枇杷一樹金　摘み尽くす　枇杷　一樹の金

【詩題】『注解』「夏日」。『全宋詩』「初夏遊張園」。
【作者】戴復古、字は式之、号は石屏。南宋後期の「江湖派」の代表的な詩人。『注解』「戴復古」。
【詩句】第二句「晴陰」、『全宋詩』「陰晴」。
【大意】初夏、友人の庭園を訪れた時の情景をうたう。池の中のカモの雛たちは水の浅い深いなどお構いなく、梅が熟する頃の天気は、半ばは晴れ、半ばは曇り。東の庭で酒盛りをし、西の庭で酔いしれ、木いっぱいに成っている黄金色のビワの実を、すっかり摘み取ってしまった。

〔唐賢〕秋　　杜牧

紅燭秋光冷画屏　紅燭　秋光　画屏に冷ややかなり
軽羅小扇撲流螢　軽羅の小扇　流螢を撲つ
天階夜色涼如水　天階の夜色　涼しきこと水の如し
臥看牽牛織女星　臥して看る　牽牛織女の星

【詩題】『注解』「七夕」。『全唐詩』「秋夕」。
【作者】杜牧、字は牧之。晩唐の代表的な詩人。
【詩句】第一句「紅」、『注解』「銀」。第三句「階」、『注解』「街」。第四句「臥」、『全唐詩』「坐」。
【大意】宮女の悲しみをうたう。赤いロウソクは秋の光をともし、絵模様のある屏風を冷たく照らす。軽い薄絹の団扇で、飛んで来るホタルを打つしぐさをしてみる。夜空を流れる天の川は、水のように涼しげな風情。横になって、牽牛と織女の星を眺めやる。

〔時賢〕秋　　劉武子

乳鴉啼散玉屏空　乳鴉　啼き散じ　玉屏　空し
一枕新涼一扇風　一枕の新涼　一扇の風
睡起秋声無覓処　睡りより起くれば　秋声　覓むる処無く
満街梧葉月明中　満街の梧葉　月明の中

【詩題】『注解』「立秋」。『全宋詩』「立秋日」。
【作者】劉翰、字は武子。南宋の詩人。
【詩句】第一句「乳」、『全宋詩』「乱」。第四句「街」、『注解』『全宋詩』「階」。「月明中」、『注解』「月中明」。
【大意】小ガラスたちは鳴きながらねぐらに帰り、美しい屏風のあたりはひっそりと静まりかえる。枕元に感じる新秋の涼し

さ、一吹きの風。眠りから起きてみれば秋の物音はさがし求めることもできず、散り落ちた梧桐の葉が月明かりの中に見えるばかり。

巻三　節候門　節日の詩

主な細目は「元日」「立春」「上元」「清明」。このうち「上元」に蘇軾の詩が見え、「清明」に杜牧、韓翃、王禹偁の詩が見える。

〔宋賢〕侍宴御楼　御楼にて宴に侍る　蘇東坡

澹月疎星繞建章　澹月　疎星　建章を繞る
仙風吹下御炉香　仙風　吹き下り　御炉　香る
侍臣鵠立通明殿　侍臣　鵠立す　通明殿
一朶紅雲捧玉皇　一朶の紅雲　玉皇を捧ぐ

【詩題】『注解』「上元侍晏」。『全宋詩』「上元侍飲楼上三首呈同列」其一。
【作者】蘇軾、字は子瞻、号は東坡居士。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第一句「澹」、『注解』「淡」。
【大意】宮中の宴会の情景をうたう。うっすらとかかる月とまばらな星が建章宮をめぐっている。仙界からの風が吹き下り、香炉の香りが一面に広がる。侍臣たちは水鳥のように背筋を伸ばして通明殿に立ち並び、それはあたかもひとかたまりの赤い雲が玉皇大帝を乗せているかのようである。

〔唐賢〕清明　杜牧

清明時節雨紛紛　清明の時節　雨　紛紛
路上行人欲断魂　路上の行人　魂を断たんと欲す
借問酒家何処有　借問す　酒家　何処にか有る
牧童遥指杏花村　牧童　遥かに指さす　杏花村

【詩題】『注解』「清明」。『全唐詩』失収。
【作者】杜牧は既出。晩唐の代表的な詩人。
【大意】清明節の感慨をうたう。清明節の頃は雨がサアサアと降りしきる。道行く旅人は、心細さに魂も消え入りそう。おたずねします、飲み屋はどこですか。牧童が指さしたのは、はるか遠くのアンズの花咲く村里。

〔唐賢〕寒食　韓翃

春城無処不飛花　春城　処として花を飛ばさざる無く
寒食東風御柳斜　寒食　東風　御柳　斜めなり
日暮漢宮伝蠟燭　日暮　漢宮　蠟燭を伝え

軽煙散入五侯家　軽煙　散じて入る　五侯の家

【詩題】『注解』『全唐詩』「寒食」。

【作者】韓翃、字は君平。中唐の詩人で、「大暦十才子」の一人に数えられる。『注解』「韓翃」。『合璧』「項翃」。

【大意】寒食節の情景をうたう。春の街は、どこもかしこも花が散り風に舞う。寒食の時節、宮城の柳の枝は春風に吹かれて斜めにそよいでいる。夕暮れ、漢の宮殿では火禁明けの火をともしたロウソクを伝え、うっすらとした煙がそれぞれに五人の貴人の屋敷に入って行く。

〔宋賢〕清明　王元之

無花無酒過清明　花も無く　酒も無く　清明を過ごし
興味蕭然似野僧　興味　蕭然として野僧に似たり
昨日隣家乞新火　昨日　隣家　新火を乞う
暁窓分与読書灯　暁窓より分かち与う　読書の灯

【詩題】『注解』「清明」。『全宋詩』「清明感事三首」其一。

【作者】王禹偁、字は元之。北宋初期の代表的な詩人。『注解』「王禹偁」。

【詩句】第三句「日」、『全宋詩』「夜」。

【大意】清明節の感慨をうたう。花もなく酒もなく清明の佳節を過ごし、心持ちはわびしく、まるで山寺の坊さんのよう。昨日、隣家が新しい火種をほしいと言って来たので、明け方の窓辺から読書の灯火を分けてあげた。

巻四　節候門　節日の詩

主な細目は「端午」「立秋」「七夕」「中秋」「重陽」「冬至」「除夜」。このうち「七夕」に楊朴の詩が見える。

〔宋賢〕七夕　楊朴

未会牽牛意若何　未だ会せず　牽牛　意は若何
須邀織女弄金梭　邀うるを須いんや　織女の金梭を弄するを
年年乞与人間巧　年年　人間に巧を乞与するも
不道人間巧已多　道わざるや　人間　巧　已に多きを

【詩題】『注解』『全宋詩』「七夕」。

【作者】楊朴、字は契玄。北宋初期の隠者。

【詩句】第四句「已」、『注解』「幾」。

【大意】七夕の日に芸事の上達を祈る「乞巧」の風習を風刺する。いまだに理解できない。牽牛は一体どういうつもりなのだろう。金の梭を操る織女を迎える必要などあるのだろうか。毎年毎年世の中に巧みさを分け与えているが、世の中に巧みさは

すでに十分多いことに気づかないのだろうか。

巻五　気候門　気候に関する詩

主な細目は「寒」「暑」「暖」「涼」「晴」「旱」。このうち「晴」に王駕の詩が見える。

〔唐賢〕晴　王駕

雨前初見花間蕊　雨前　初めて見る　花間の蕊
雨後兼無葉裏花　雨後　兼ねて無し　葉裏の花
蛺蝶飛来過墻去　蛺蝶　飛び来たり　墻を過ぎて去る
応疑春色在隣家　応に疑うべし　春色　隣家に在らんかと

【詩題】『注解』「春晴」。『全唐詩』「雨晴」。
【作者】王駕、字は大用、号は守素先生。晩唐の詩人。
【詩句】第二句「兼」、『注解』「全」。「裏」、『注解』「底」。第三句「蛺」、『注解』「蜂」。「飛来」、『注解』「紛紛」。第四句「応」、『注解』『全唐詩』「却」。
【大意】晩春の雨上がりの情景をうたう。雨の降る前、ようやく花の間の蕊を見たと思ったら、雨の後には、葉陰の花もろともになくなってしまった。チョウたちは飛んできて、垣根を越えて去って行く。きっと、隣の家にはまだ春の景色があるのではないかと疑っているに違いない。

巻六　昼夜門　昼夜に関する詩

主な細目は「暁」「昼」「晩」「夜」。このうち「夜」に張継と蘇軾の詩が見える。

〔唐賢〕舟中　張継

月落烏啼霜満天　月　落ち　烏　啼きて　霜　天に満つ
江楓漁火対愁眠　江楓　漁火　愁眠に対す
姑蘇城外寒山寺　姑蘇城外の寒山寺
夜半鐘声到客船　夜半の鐘声　客船に到る

【詩題】『注解』『全唐詩』「楓橋夜泊」。
【作者】張継、字は懿孫。盛唐から中唐にかけての詩人。
【詩句】第二句「火」、『全唐詩』「父」。
【大意】船旅の夜の感慨をうたう。月は沈みカラスが鳴いて、霜の気配が空いっぱいに満ちわたる。川辺のカエデと漁火が、愁いつつ眠る私の目に映って見える。すると、蘇州の町外れの寒山寺から、真夜中を告げる鐘の音が、私の乗る旅の小舟に聞こえて来た。

〔宋賢〕春夜　　蘇東坡

春宵一刻値千金　　春宵　一刻　値　千金
花有清香月有陰　　花に清香有り　月に陰有り
歌管楼台声細細　　歌管　楼台　声　細細
鞦韆院落夜沈沈　　鞦韆　院落　夜　沈沈

【詩題】『注解』「春宵」。『全宋詩』「春夜」。
【作者】蘇軾（東坡）は既出。北宋の代表的な詩人。
【大意】春の夜の感慨をうたう。春の夜のひとときは、千金の値うち。花にはすがしい香りがあり、月はおぼろにかすんでいる。楼台で奏でられていた歌や笛の音は今ではか細くなり、中庭にはブランコがあるばかりで人の姿は見えず、夜は次第に更けて行く。

巻七　百花門　各種の花に関する詩

主な細目は「花」「梅花」。このうち「花」に朱淑真の詩が見え、「梅花」に杜耒、白玉蟾、盧梅坡の詩が見える。

〔宋賢〕落花　　朱淑真

連理枝頭花正開　　連理の枝頭　花　正に開くに
妬花風雨便相催　　花を妬む風雨　便ち相催る
願教青帝長為主　　願わくは青帝をして長に主為らしめ
莫遣紛紛点翠苔　　紛紛として翠苔に点ぜしむる莫からんことを

【詩題】『注解』「落花」。『全宋詩』「惜春」。
【作者】朱淑真は既出。北宋末～南宋初の女性詩人。『注解』「朱淑貞」。
【詩句】第二句「便」、『全宋詩』「苦」。第三句「長」、『注解』「常」。第四句「点」、『全宋詩』「落」。
【大意】過ぎ行く春を惜しむ心情をうたう。連理の枝に今まさに花が咲いているのに、花をねたむ嵐がすぐさま花を吹き散らしてしまった。どうか春の神様をいつも四季の主として、花がはらはらと青いコケの上に散り落ちることがないようにしてもらいたいものだ。

〔時賢〕梅花　　杜耒

寒夜客来茶当酒　　寒夜　客　来たりて　茶　酒に当つ
竹炉湯沸火初紅　　竹炉　湯　沸き　火　初めて紅なり
尋常一様窓前月　　尋常に一様なり　窓前の月
纔有梅花便不同　　纔かに梅花有りて　便ち同じからず

【詩題】『注解』『全宋詩』「寒夜」。
【作者】杜耒、字は小山。南宋の詩人。『注解』「杜小山」。
【大意】冬の夜に来客があったことをうたう。寒い夜に来客があったので、酒のかわりに茶を出してもてなすことにした。竹の囲炉裏で湯をわかし、火は赤くなったばかり。窓から見える月はいつもと同じだが、梅の花があるおかげで、いつもとは趣が違って見える。

〔時賢〕梅花　　白玉蟾

南枝才放両三花　南枝　才かに放く　両三花
雪裏吟香弄粉些　雪裏　香を吟じ　粉些を弄ぶ
淡淡著煙濃著月　淡淡と煙を著け　濃く月を著く
深深籠水浅籠沙　深深と水を籠め　浅く沙を籠む

【詩題】『注解』「早春」。『全宋詩』「奉酬臞庵李侍郎五首」其二。
【作者】白玉蟾、原名は葛長庚。字は白叟。南宋の道士。
【詩句】第一句「才」、『注解』『全宋詩』「纔」。第二句「吟」、『全宋詩』「吹」。
【大意】初春の梅花をうたう。南向きの枝に、ようやく二三の梅の花が開いた。私は雪の中でその香りを詩にうたい、その白い花をめで楽しむ。梅は、淡くもやがかかり、濃く月の光を帯びている。また、深く水におおわれ、浅く砂におおわれている。

〔時賢〕梅花　　盧梅坡

梅雪争春未肯降　梅と雪と春を争い　未だ降るを肯んぜず
騒人閣筆費平章　騒人　筆を閣き　平章を費やす
梅須遜雪三分白　梅は須らく雪に遜すべし　三分の白
雪却輸梅一段香　雪は却って梅に輸す　一段の香

【詩題】『注解』「雪梅」。『全宋詩』「梅花」。
【作者】盧梅坡は、南宋の詩人。(5)
【詩句】第二句「平」、『注解』「評」。
【大意】梅と雪の優劣をうたう。梅と雪が春の主役の座を争い、どちらも降参しようとしない。詩人は筆をおいて、公平に論評する。梅は白さの点では雪にゆずるが、雪は香りにおいては梅に負けている。

巻八　百花門　　各種の花に関する詩

主な細目は「桃花」「杏花」「梨花」「海棠」。このうち「桃花」に劉禹錫の詩が見え、「海棠」に蘇軾の詩が見える。

〔唐賢〕遊玄都観　　玄都観に遊ぶ　　劉禹錫

紫陌紅塵払面来　　紫陌の紅塵　面を払いて来たる
無人不道看花回　　人として　花を看て回ると道わざる無し
玄都観裏桃千樹　　玄都観裏　桃千樹
尽是劉郎去後栽　　尽く是れ　劉郎　去りし後に栽えたり

【詩題】『注解』「玄都観桃花」。『全唐詩』「元和十一年自朗州召至京戯贈看花諸君子」。
【作者】劉禹錫、字は夢得。中唐の代表的な詩人。
【大意】左遷先から都に呼び戻されての感慨をうたう。玄都観に向かって歩いて行けば、大通りの塵ほこりが、顔に吹きつけて来る。誰一人、花を見ての帰りだと言わぬ者はいない。玄都観の中には桃の木が千本も植えてあるが、それらはことごとくこの私が都を去った後で植えられたものだ。

〔宋賢〕海棠　　蘇東坡

東風渺渺汎崇光　　東風　渺渺として　崇光を汎かぶ
香霧空濛月転廊　　香霧　空濛として　月　廊に転ず
只恐夜深花睡去　　只だ恐る　夜　深くして　花　睡り去らんことを
高燒銀燭照紅粧　　高く銀燭を燒きて　紅粧を照らさん

【詩題】『注解』『全宋詩』「海棠」。
【作者】蘇軾（東坡）は既出。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第一句「渺渺」、『注解』『全宋詩』「嫋嫋」。「汎」、『注解』『全宋詩』「泛」。第四句「高」、『注解』『全宋詩』「故」。「銀」、『注解』『全宋詩』「高」。
【大意】海棠の花をいとおしむ心情をうたう。春風が遠くから吹き、海棠の花は気高く輝く。かぐわしい夜霧がぼんやりと立ちこめ、月は回廊の上を進んで行く。夜が更けて花が眠ってしまうのではないかと心配なので、銀のロウソクを高くともし、花の赤い化粧を照らし出すことにしよう。

巻九　百花門　各種の花に関する詩

巻十　百花門　各種の花に関する詩

主な細目は「桂花」「菊花」「蘭花」「薔薇」「葵花」「芭蕉」「玉蕊花」「橘花」「山茶」「榴花」「水仙」「茉莉」。このうち「榴花」に韓愈の詩が見える。

〔唐賢〕榴花　　韓昌黎

五月榴花照眼明　　五月　榴花　眼に照りて明らかなり
枝間時見子初成　　枝間　時に見る　子の初めて成るを

可憐此地無車馬　憐れむべし　此の地　車馬無く
顚倒青苔落絳英　青苔に顚倒して　絳英を落とすを

【詩題】『注解』「題榴花」。『全唐詩』「題張十一旅舍三詠」其一「榴花」。
【作者】韓愈は既出。中唐の代表的な詩人。『注解』「朱熹」。
【詩句】第四句「青」、『注解』「蒼」。
【大意】ひっそりと咲いて散るザクロの花をうたう。真夏の五月、ザクロの花は目にもあざやかに咲き誇る。枝の間には、時としてなったばかりの実が見える。かわいそうに、ここは車や馬が通り過ぎることもなく、誰にも見られないままに、青いコケの上に赤い花びらを逆さまに落としている。

巻十一　竹木門　竹や木に関する詩

巻十二　天文門　天文に関する詩

主な細目は「日」「月」「星」「雲」「風」「雨」。このうち「月」に李商隠の詩が見える。

〔唐賢〕霜月　李商隠

初聞征雁已無蟬　初めて征雁を聞くに　已に蟬無し
百尺樓南水接天　百尺の楼南　水　天に接す
青女素娥俱耐冷　青女　素娥　俱に冷きに耐え
月中霜裏鬬嬋娟　月中　霜裏　嬋娟を鬬わす

【詩題】『注解』『全唐詩』「霜月」。
【作者】李商隠、字は義山、号は玉溪生。晩唐の代表的な詩人。
【詩句】第二句「南」、『注解』「台」、『全唐詩』「高」。
【大意】冬の情景をうたう。ようやく渡り鳥の雁の鳴き声を聞く頃には、もうセミはいない。百尺もの楼の南側では、川の水が空まで続いて流れている。霜の女神の青女と月の女神の素娥はどちらも寒さに耐えながら、月の中、霜の中で美しさを競い合っている。

巻十三　天文門　天文に関する詩

巻十四　地理門　地理に関する詩

主な細目は「山」「村」「郊野」。このうち「山」に李渉の詩が見え、「村」に范成大の詩が見える。

〔唐賢〕登山　　李渉

終日昏昏醉夢間　終日　昏昏たり　醉夢の間
忽聞春尽強登山　忽ち春尽くると聞き　強いて山に登る
因過竹院逢僧話　竹院を過ぎり　僧に逢いて話すに因り
又得浮生半日閑　又た得たり　浮生　半日の閑

【詩題】『注解』「登山」。『全唐詩』「題鶴林寺僧舎」。
【作者】李渉、号は清渓子。中唐の詩人。
【大意】春の終わりに山寺を訪ねたことをうたう。一日中、酔い心地の夢の中でぼんやり過ごしていたが、急に春が終わると聞いて、気持ちを奮い立たせて山に登ってみた。竹に囲まれた僧院に立ち寄り、坊さんに会って話をしたために、半日ののどかな時間を過ごすことができた。

〔時賢〕田家　　范成大

昼出耘苗夜績麻　昼は出でて苗を耘り　夜は麻を績ぐ
村荘児女各当家　村荘の児女　各おの家に当たる
童孫未解供耕織　童孫　未だ解く耕織に供せざるも
也傍桑陰学種瓜　也た桑陰に傍いて瓜を種うるを学ぶ

【詩題】『注解』「田家」。『全宋詩』「四時田園雑興六十首」のうち「夏日田園雑興十二絶」其七。
【作者】范成大、字は至能、号は石湖居士。南宋の代表的な詩人。
【詩句】第一句「苗」、『注解』『全宋詩』「田」。
【大意】農家の夏の労働をうたう。昼間は野良に出て雑草を取り除き、夜は家で麻糸をつむぐ。農村の男子も女子も、それぞれ家の仕事を分担する。幼い子どもたちはまだ耕したり織ったりはできないが、それでもクワの木陰で瓜を植えるまねごとをしている。

巻十五　地理門　　地理に関する詩

主な細目は「江」「湖」「渓」「泉」「舟」。このうち「湖」に楊万里、蘇軾、徐元杰の詩が見え、「渓」に韋応物の詩が見え、「舟」に張継の詩が見える。

〔宋賢〕西湖　　蘇東坡

畢竟西湖六月中　畢竟　西湖　六月の中
風光不与四時同　風光　四時と同じからず
接天蓮葉無窮碧　天に接する蓮葉　無窮に碧に
映日荷花別様紅　日に映ずる荷花　別様に紅なり

【詩題】『注解』「西湖」。『全宋詩』「暁出浄慈送林子方二首」其二。

【作者】『分門』は蘇軾（東坡）とするが、実際は楊万里。楊万里は既出。南宋の代表的な詩人。したがって「宋賢」ではなく「時賢」に分類すべきであろう。

【大意】夏の終わりの西湖の情景をうたう。とどのつまり晩夏六月の西湖は、他の時季とは風景が断然違う。天まで連なるハスの葉は果てしなく緑色で、日の光に映えるハスの花は、段違いに赤く美しい。

〔宋賢〕初晴後雨　　初め晴れ後に雨ふる　　蘇東坡

水光瀲灩晴方好　　水光　瀲灩として　晴れて方に好く
山色空濛雨亦奇　　山色　空濛として　雨も亦た奇なり
欲把西湖比西子　　西湖を把りて　西子に比せんと欲すれば
淡粧濃抹総相宜　　淡粧　濃抹　総て相宜し

【詩題】『注解』「湖上初雨」。『全宋詩』「飲湖上初晴後雨二首」其二。

【作者】蘇軾（蘇軾）は既出。北宋の代表的な詩人。

【詩句】第一句「方」、『注解』「偏」。第三句「欲」、『全宋詩』「若」。第四句「総」、『注解』「也」。

【大意】杭州の西湖の美しさをうたう。水面がキラキラと光り輝いていると、晴れてこそすばらしいと思えるが、山の色がぼんやりかすんでいるのを見ると、雨もまたすばらしい。西湖をいにしえの美女西施にたとえるならば、薄化粧でも厚化粧でも、すべて似つかわしい。

〔時賢〕湖景　　徐元杰

花開紅樹乱鶯啼　　花　紅樹に開き　乱鶯　啼く
草長湖平白鷺飛　　草　長じ　湖　平らかに　白鷺　飛ぶ
風物晴和人意好　　風物　晴れ和して　人意　好し
夕陽簫鼓幾船帰　　夕陽　簫鼓　幾船か帰る

【詩題】『注解』『全宋詩』「湖上」。

【作者】徐元杰、字は伯仁、号は梅野。南宋の詩人。

【詩句】第二句「長」、『注解』「上」。「湖平」、『注解』『全宋詩』「平湖」。第三句「物」、『注解』「日」。

【大意】春の西湖の情景をうたう。赤い花が木に咲き、ウグイスは乱れ鳴く。草は生い茂り、湖は水を満々とたたえ、シラサギが飛んでいる。風物は晴れてなごやかであり、人々の心はやわらいでいる。夕陽の中、笛や太鼓を奏でながら、何艘の遊覧船が帰って来ることだろうか。

〔唐賢〕溪居　　韋応物

独憐幽草澗辺生　　独り憐れむ　幽草の澗辺に生ずるを
上有黄鸝深樹鳴　　上に黄鸝の深樹に鳴く有り
春潮帯雨晚来急　　春潮　雨を帯び　晚来　急なり
野渡無人舟自横　　野渡　人無く　舟　自ら横たわる

【詩題】『注解』『全唐詩』「滁州西澗」。
【作者】韋応物は、中唐の代表的な詩人。
【大意】谷川のほとりの情景をうたう。ただ一人、草が谷川のほとりに生い茂るのをいたわしく思う。その上では、コウライウグイスが深い木立の中で鳴いている。春の川の水は雨を伴い、夕方になって流れが急になった。野中の渡し場には人影がなく、一艘の小舟がぽつんと横たわっている。

〔唐賢〕舟　　張継

既出の張継「舟中」（「楓橋夜泊」）と同じ詩（重複）。詩題以外は文字の異同なし。

巻十六　宮室門（『合璧』欠）

各種の建築物に関する詩

主な細目は「宮殿」「宮詞」「楼」「館舎」「寺」。このうち「宮詞」に王建と洪咨夔の詩が見え、「寺」に杜牧の詩が見える。

〔唐賢〕宮詞　　劉長卿

金殿当頭紫閣重　　金殿当頭　紫閣　重なる
仙人掌上玉芙蓉　　仙人掌上　玉芙蓉
太平天子朝迎日　　太平の天子　朝迎の日
五色雲車駕六龍　　五色の雲車　六龍に駕す

【詩題】『注解』「宮詞」。『全唐詩』「宮詞一百首」其九一。
【作者】『分門』は劉長卿とするが、実際は王建。王建、字は仲初。中唐の代表的な詩人。『注解』「林洪」。
【詩句】第三句「迎」、『注解』「元」。
【大意】唐の皇帝が老子に参拝する情景をうたう。黄金の宮殿の上に、紫の楼閣が重なりあう。仙人の像の手のひらの上には、玉の芙蓉が置かれている。太平の天子様が玄元皇帝（老子）をお迎えになる日。五色の雲に囲まれた御車を、六匹の龍にお引かせになる。

〔時賢〕宮詞　　洪舜俞

禁門深鎖寂無嘩　　禁門　深く鎖され　寂として　嘩しき無し

濃墨淋漓両相麻　　濃墨　淋漓たり　両相麻
唱徹五更天未暁　　唱　五更に徹するも　天　未だ暁ならず
一池月浸紫薇花　　一池　月は浸す　紫薇の花

【詩題】『注解』「禁鎖」。『全宋詩』「六月十六日宣鎖」。
【作者】洪咨夔、字は舜俞、号は平斎。南宋の詩人。『注解』「洪遵」。
【詩句】第一句「鎖」、『全宋詩』「鑰」。第四句「池」、『注解』「墀」。
【大意】宮中での宿直をうたう。禁中の門は奥深く閉ざされ、ひっそりとしている。濃い墨をすり、左右の大臣を任命する二枚の辞令を書き記す。夜明けを告げる役人の声が聞こえても、夜はまだ明けない。池のまわりに咲くサルスベリの花を、月は照らしている。

〔唐賢〕寺　　杜牧

十里鶯啼緑映紅　　十里　鶯　啼きて　緑　紅に映ず
水村山郭酒旗風　　水村　山郭　酒旗の風
南朝四百八十寺　　南朝　四百八十寺
多少楼台煙雨中　　多少の楼台　煙雨の中

【詩題】『注解』「江南春」。『全唐詩』「江南春絶句」。
【作者】杜牧は既出。晩唐の代表的な詩人。
【詩句】第一句「十」、『全唐詩』「千」。
【大意】江南の春の情景をうたう。十里四方にウグイスの鳴き声が響きわたり、緑の木々の中、赤い花が色鮮やかに見える。水辺の村でも山すその村でも、飲み屋の目印の旗が風になびいている。ここ南京は、その昔南朝の頃には四百八十もの寺があったというが、いくつとも知れない楼台が、けぶるような雨の中にかすんで見える。

巻十七　器用門（『合璧』欠）　各種の器物に関する詩

巻十八　音楽門　　音楽および各種の楽器に関する詩

主な細目は「箏」「笛」「角」「鐘」「砧」「鞦韆」「打毬」。このうち「打毬」に晁説之の詩が見える。

〔宋賢〕打毬　　晁景迂

閶闔千門万戸開　　閶闔　千門　万戸　開き
三郎沈醉打球回　　三郎　沈醉し　球を打ちて回る
九齢已老韓休死　　九齢　已に老い　韓休　死す
無復明朝諫疏来　　復た明朝　諫疏の来たること無からん

【詩題】『注解』「打毬図」。『全宋詩』「題明王打毬図」。
【作者】晁説之、字は以道、一に伯以。北宋の詩人。『注解』「鼂無咎」。
【詩句】第二句「球」、『注解』『全宋詩』「毬」。第三句「老」、『全宋詩』「去」。
【大意】唐の玄宗がけまりに興じる姿を、風刺を込めてうたう。宮城の門という門は開け放たれ、皇帝の三郎（玄宗）は酒に酔いしれ、けまりに興じて帰って来る。口うるさい大臣たちはもういない。もう二度と、翌朝自分をいさめる書状が届くことはないだろう。

巻十九　禽獣門　各種の鳥や動物に関する詩

主な細目は「鶯」「燕」「百舌」「子規」「雁」「鵲」「鴛鴦」「鷺」「鶴」「百禽」「馬」「猫」「鶏」。このうち「鶯」に劉克荘の詩が見え、「燕」に劉禹錫の詩が見える。

〔時賢〕鶯　劉後村

擲柳遷喬大有情　柳を擲ち　喬に遷り　大いに情有り
交交時作弄機声　交交として　時に作す　機を弄する声
洛陽三月春如錦　洛陽　三月　春　錦の如し
多少工夫織得成　多少の工夫にて織り成すを得たるや

【詩題】『千家詩』『全宋詩』「鶯梭」。
【作者】劉克荘、字は潜夫、号は後村居士。南宋後期の「江湖派」の代表的な詩人。
【詩句】第三句「春」、『注解』「花」。
【大意】ウグイスを機織りの梭に見立ててうたう。ウグイスたちは枝から枝へと飛び移り、大いに風情がある。互いに鳴きかわし、折に触れては梭を操るような音をたてる。晩春三月の洛陽の町は、まるで錦のような春景色。ウグイスたちはどれほどの手間ひまをかけて、この風景を織りなしたのだろうか。

〔唐賢〕燕　劉禹錫

朱雀橋辺野草花　朱雀橋辺　野草　花さき
烏衣巷口夕陽斜　烏衣巷口　夕陽　斜めなり
旧時王謝堂前燕　旧時　王謝　堂前の燕
飛入尋常百姓家　飛びて入る　尋常なる百姓の家

【詩題】『注解』「烏衣巷」。『全唐詩』「金陵五題」其二「烏衣巷」。
【作者】劉禹錫は既出。中唐の代表的な詩人。
【大意】古都を訪れて昔を回想する。朱雀橋のあたりには野草が花を咲かせ、烏衣口の入り口では夕陽が斜めに差している。その昔、六朝時代の王家や謝家の屋敷の前に巣を作っていたツ

バメたちは、今ではごく普通の一般庶民の家に飛んで入って行く。

巻二十　昆虫門　各種の昆虫に関する詩

第二部分　前集　巻二十一～巻二十五および残頁

この部分は『合璧』には収録されていない。

巻二十一　人品門（『合璧』欠）　各種の人物に関する詩

巻二十二　人品門（『合璧』欠）　各種の人物に関する詩

主な細目は「僧」「術士」「農」「漁父」「樵夫」「牧童」。このうち「牧童」に次の詩が見える。

〔唐賢〕牧童　　鍾弱翁

草鋪横野六七里　　草　横野に鋪く　六七里
笛弄晩風三両声　　笛　晩風に弄ぶ　三両声
帰来飽飯黄昏後　　帰り来たりて飯に飽く　黄昏の後
不脱蓑衣臥月明　　蓑衣を脱がず　月明に臥す

【詩題】『注解』「答鍾弱翁」。『全宋詩』「絶句」。『全唐詩』「牧童」。
【作者】『分門』は鍾弱翁とするが、本来は牧童。南宋・胡仔の『苕溪漁隠叢話』によれば、呂巖の従者の牧童が北宋・鍾弱翁の前で即興でうたった詩。『全唐詩』「呂巖」。
【詩句】第二句「両」、『注解』『全宋詩』『全唐詩』「四」。
【大意】牧童の気ままな生活をうたう。草は六七里もの長さにわたって野に生え、笛を夕方の風の中で二声三声と気ままに吹き鳴らす。日が暮れた後、家に帰って来て腹一杯晩飯を食べると、着ている蓑を脱ぎもせず、そのまま月明かりの中で横になる。

巻二十三　人品門（『合璧』欠）　各種の人物に関する詩

巻二十四　宴賞門（『合璧』欠）　茶と酒に関する詩

巻二十五　性適門（『合璧』欠）　人間の営為に関する詩

主な細目は「睡」「眺望」「離別」「思憶」。このうち「離別」に王維の詩が見える。

〔唐賢〕離別　王維

渭城朝雨裛軽塵　渭城の朝雨　軽塵を裛し
客舎青青柳色新　客舎　青青として　柳色　新たなり
勧君更進一杯酒　君に勧む　更に進めよ　一杯の酒
西出陽関無故人　西のかた陽関を出ずれば　故人無からん

【詩題】『注解』「送使安西」。『全唐詩』「渭城曲」（一に「送元二使安西」）。
【作者】王維、字は摩詰。盛唐の代表的な詩人。
【詩句】第一句「裛」、『注解』『全唐詩』「浥」。第二句「柳色新」、『全唐詩』「楊柳春」。第三句「進」、『注解』『全唐詩』「尽」。
【大意】西域に旅立つ友人を見送ることをうたう。渭城に降った朝方の雨は軽く舞う塵ほこりをしっとりとうるおし、宿泊した旅館の前には、ヤナギが青々と茂り、新鮮に見える。君に勧めよう、さあ、もう一杯酒を飲みたまえ。西に向かい旅をして陽関を出てしまえば、もう昔なじみもいないだろうから。

残頁（『合璧』欠）

巻二十五の後に保存されている断片。分類名不明。

第三部分　後集　巻一～巻十

巻一　仕宦門　仕官に関する詩

主な細目は「朝見」「禁直」「下直」「従駕」「赴任」「官舎」「満替」。このうち「禁直」に白居易、王安石、周必大、洪咨夔の詩が見える。

〔唐賢〕直中書省　中書省に直す　白楽天

糸綸閣下文書静　糸綸閣下　文書　静かに
鐘鼓楼中刻漏長　鐘鼓楼中　刻漏　長し
独坐黄昏誰是伴　独り黄昏に坐すれば　誰か是れ伴なる
紫薇花対紫薇郎　紫薇の花は対す　紫薇の郎

【詩題】『注解』「直中書省」。『全唐詩』「紫薇花」。
【作者】白居易、字は楽天、号は香山居士。中唐の代表的な詩人。『注解』「白居易」。
【詩句】第一句「書」、『注解』「章」。
【大意】宮中での宿直をうたう。糸綸閣の下で静かに文書を調べている。鐘鼓楼の中からは、漏刻の音がいつまでも聞こえている。夕暮れに一人すわっている私の伴侶は誰かと言えば、サルスベリの花（紫薇花）が中書郎（紫薇郎）の私に向きあって

いる。

〔宋賢〕夜直　　天介甫（ママ）（『合璧』同上）

金炉香燼漏声残　　金炉　香　燼き　漏声　残なわる
剪剪軽風陣陣寒　　剪剪たる軽風　陣陣に寒し
春色悩人眠不得　　春色　人を悩まして眠り得ず
月移花影上欄干　　月　花影を移して　欄干に上らしむ

【詩題】『注解』「春夜」。『全宋詩』「夜直」。
【作者】『分門』は「天介甫」とするが、「天」は「王」の誤り。王安石、字は介甫、号は半山。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第一句「燼」、『注解』『全宋詩』「尽」。第四句「干」、『注解』「杆」。
【大意】宮中での春の宿直の情景をうたう。黄金色の香炉の香は燃え尽き、漏刻の音も途絶えがち。そよそよと吹く風の一吹きごとに、肌寒さを感じる。春の気配は人を悩ましい思いにさせ、眠ることができない。時は過ぎ、月は花の影を欄干の上にまでのぼらせた。

〔時賢〕入直召対選徳殿賜茶而退　　入直し選徳殿にて召対し茶を賜りて退く　　周益公

緑槐夾道集昏鴉　　緑槐　道を夾み　昏鴉を集む
勅使伝宣坐賜茶　　勅使　宣を伝え　坐して茶を賜る
帰到玉堂清不寐　　帰りて玉堂に到れば　清くして寐ねず
月鈎初上紫薇花　　月鈎　初めて上る　紫薇の花

【詩題】『注解』「入直」。『全宋詩』は『分門』に同じ。
【作者】周必大、字は子充、号は省斎居士。益国公に封じられたので周益公と呼ばれる。南宋の代表的な文人。
【詩句】第二句「伝」、『全宋詩』「催」。
【大意】宮中で宿直し、皇帝から茶を賜った時の感慨をうたう。緑のエンジュが道の両側に生え、夕暮れのカラスが集まっている。皇帝の使者がやって来て呼び出しを受け、着席のままで御茶をいただいた。翰林院に帰って来れば、すがすがしい気持ちになって眠ることができない。鈎のような三日月が、ようやくサルスベリの花の上に出たばかりの頃。

〔時賢〕六月十六日宣鎖　　洪平斎

既出の洪舜俞（洪咨夔）「宮詞」と同じ詩（重複）。ただし第一句「鎖」を「鑰」とする。

巻二　投献門　　献上に関する詩

巻三　門名未詳　訪問に関する詩

主な細目は「謁見不遇」「訪僧道不遇」「謝見訪」。このうち「謁見不遇」に葉紹翁の詩が見える。

〔時賢〕遊園不値　園に遊ぶも値わず　葉靖逸

応嫌屐歯印蒼苔　応に嫌うべし　屐歯の蒼苔に印するを
十扣柴門九不開　十たび柴門を扣くも　九たびは開かず
春色満園開不住　春色　園に満ち　開き住せず
一枝紅杏出墻来　一枝の紅杏　墻を出でて来たる

【詩題】『注解』「遊小園不値」。『全宋詩』「遊園不値」。
【作者】葉紹翁、字は嗣宗、号は靖逸。南宋後期の「江湖派」の詩人。『注解』「葉適」。
【詩句】第二句「門」、『注解』「扉」。第三句「開」、『注解』『全宋詩』「関」。
【大意】友人の庭園を訪ねたが、中に入れてもらえなかった時の状況をうたう。きっと青いコケの上にゲタの歯の跡がつくのをいやがっているに違いない。何度も戸をたたいても、なかなか開けてもらえない。だが春の風情は庭いっぱいに満ちあふれ、閉じ込めておくことはできない。一本のアンズの枝が、垣根を越えて外にのびている。

以下の諸巻には『千家詩』の詩は見えない。

巻四　慶寿門　長寿をことほぐ詩
巻五　慶寿門　長寿をことほぐ詩
巻六　慶賀門　祝賀の詩
巻七　干求門　人に物を求める詩
巻八　饋送門　人に物を贈る詩
巻九　謝恵門　人から物をもらったことに感謝する詩
巻十　謝饋送門　人から物を贈られたことに感謝する詩

まとめ

以上、『分門』に収録されている『千家詩』七言絶句を一通り確認した。のべ五十首、重複を除けば四十八首が、『千家詩』と重複している。これらは、『千家詩』の七言絶句九十四首の約半数に相当する。中には今さら紹介するまでもない名作も含まれているが、一方で日本ではいまだにほとんど一般に紹

介されていない詩も含まれており、そうした作品をともかくも紹介できただけでも、一定の成果と考えたい。具体的には、楊朴、王令、晁説之、朱淑真、周必大、曹豳、洪咨夔、徐元杰といった、比較的マイナーな宋代詩人たちの作品である。また有名詩人でも、蘇軾の「侍宴御楼」はあまり紹介の機会に恵まれない詩であろう。

さて、次にこれら四十八首を分類別に見てみよう。

まず、前集巻一から巻二十までの第一部分。巻一が六首、巻二が八首（以上「時令門」）。巻三が四首、巻四が一首（以上「節候門」）。巻五が一首（「気候門」）、巻六が二首（「昼夜門」）。巻七が四首、巻八が二首、巻十が一首（以上「百花門」）。巻一二が一首（「天文門」）、巻十四が二首、巻十五が五首（以上「地理門」）。巻十六が三首（「宮室門」）。巻十八が一首（「音楽門」）。巻十九が二首（「禽獣門」）。以上、合計四十三首。

次に、前集巻二十一から巻二十五および残頁の第二部分。巻二十二が一首（「人品門」）、巻二十五が一首（性適門）。以上、合計二首。

最後に、後集巻一から巻十までの第三部分。後集巻一が四首（「仕宦門」）、巻三が一首（「門名未詳」）。以上、合計五首。

一見して明らかなように、第一部分に見える詩がのべ五十首のうち四十三首と圧倒的に多い。その中でも、巻一・巻二の「時令門」、巻三・巻四の「節候門」、巻七・巻八・巻十の「百花門」の多さが際だっており、これだけでも二十六首と、第一部分の過半を占める。[6]『千家詩』七言絶句の約半数は春の詩であり、中でも春の終わりの詩が多い。その多くは『分門』と共通している。通説の通り『分門』が『千家詩』の源流であるとすれば、『分門』の中でも特に巻一から巻二十までの部分が、『千家詩』七言絶句の主な来源と考えられる。

のみならず、『千家詩』（少なくとも『注解』）は詩題および詩句の表記、作者の間違いなども『分門』を踏襲している場合がある。そのことを端的に物語るのが、いわゆる杜牧の「清明」であろう。この詩は名作とされながらも杜牧自身の詩集や『全唐詩』に見えず、また押韻に唐代に見られない特徴があることから、実際には杜牧の詩ではない可能性を否定できないのであるが、その初出である『分門』を『千家詩』はそっくりそのまま踏襲している。[7]他にも、『分門』と『注解』の間には以下のような共通点が指摘できる。

一、杜牧「江南春」の冒頭を「千里」ではなく「十里」とする。

一、楊万里の西湖の詩を、蘇軾の作とする。

一、黄庭堅の鄂州南楼の詩を、王安石の作とする。

これらの点について『分門』と『千家詩』（少なくとも『注解』）は一致しており、『分門』が『千家詩』の源流であるとする通説は、十分説得力を持つ。何よりまず唐詩と宋詩が混在し

ている点、それに作者の間違いや詩句の特徴などをそのまま踏襲している点では、『分門』は紛れもなく『千家詩』の源流と言い得るであろう。

しかしその反面、『千家詩』が『分門』を忠実に継承しているとは言いがたい側面も存在する。次に、この点について考えてみたい。

まず、『分門』に確認できる『千家詩』七言絶句は約半数にとどまること。もし『分門』が正真正銘『千家詩』の母体であると言うならば、『千家詩』の詩のすべて、もしくはほぼすべてがそこに確認できてもいいはずである。それが約半数にとどまるということは、とりもなおさず、『千家詩』のすべてが『分門』に由来するわけではないことを物語っている。もっとも、『分門』は今日完全な形で伝わっているわけではないので、その残欠の部分に『千家詩』の他の詩が含まれていた可能性は否定できない。しかし、現存する部分と失われた部分の比率や、前述のように『分門』『千家詩』に共通する作品が圧倒的に第一部分に集中していることなどから考えて、残り四十六首のすべてが残欠の部分に含まれていた可能性は、決して高くないと思われる。とすれば、『分門』の四十八首を一応の基礎としつつも、残りの四十六首にはまた別の来源があると考える方が妥当である、ということになる。

また『分門』に由来することが確認できる作品についても、『千家詩』の場合は『分門』のような分類がなされておらず、すべての詩が一くくりに雑然と配列されており、この点では『千家詩』が『分門』を忠実に継承しているとは言い難い。加えて、『分門』と『注解』の間にもしばしば文字の異同があり、両者の表記が完全に一致しているわけではない。こうしたことから、『分門』が単純に『千家詩』の母体であるとは言えないように思われる。

以上を要するに、『分門』が『千家詩』の源流であるという見方は、半ば正しく、半ば正しくない。より厳密には、源流または来源の一つ、と認識すべきであろう。少なくとも、『千家詩』の詩のすべてが『分門』に含まれているわけではないことは、認識しておかねばならない。

今後の課題

今回の成果をふまえ、次の段階として、計画していることがある。それは、『千家詩』七言絶句九十四首のうち『分門』に収録されていない残りの四十六首の来源を探求することである。手始めに、『分門』とほぼ同じかやや後に出版されたと考えられる『唐宋千家聯珠詩格』について今回と同様の調査を行い、その結果をまとめてみたい。結論を先に言うと、同書には重複を除いて四十四首の『千家詩』七言絶句が確認でき、そのうち二十二首は『分門』と重複しているが、残りの二十二首は『分門』には見えない。いずれにせよ、『唐宋千家聯珠詩格』は

あるいは『千家詩』七言絶句のもう一つの源流であるかも知れない。

ただし、同書に収録された作品をあわせても合計七十首であり、残りの二十四首はどちらの書物にも見えない詩である。これらについては、更に別の来源がある可能性を考えねばならない。可能性として思い浮かぶのは、やはり宋末元初の頃に出た『詩林広記』や『三体詩』などである。

以上の考察がまとまるにはしばらく時間がかかりそうであるが、ひとまず宿題とさせていただきたい。

注

（1）『合璧』「前言」参照。

（2）念のため、「各種のテキストが編まれ」「多くの注釈書が存在」しているのはあくまでも中国での話であって、日本での話ではない。その辺の事情は、すでに拙稿「『千家詩』所収作品の日本における紹介状況―七言の作品を中心に―」（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第四十三号、二〇二〇）で説明したので参照されたい。

（3）『合璧』「前言」によれば、『分門』には大きく分けて二十二巻本と三十巻本の二つの系統があるが、『分門』の版本の問題については、煩瑣になるので本稿では深く立ち入らない。本稿では、『校證』に収録されている全体を『分門』として扱い、考察の対象とする。

（4）『校證』「点校説明」参照。

（5）銭鍾書『宋詩紀事補正』（遼寧人民出版社、遼海出版社、二〇〇三）によれば、「梅坡」は『宋詩紀事』巻六十六に収録されている南宋・盧鉞、字は威仲の号ではないか、とのこと。同書第十冊四八一四頁参照。

（6）ついでに、第一部分を前半（巻一～巻十）と後半（巻十一～巻二十）に分けた場合、前半が二十九首、後半が十四首であり、前半が多いことも指摘しておきたい。

（7）松浦友久『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七）参照。

おわびと訂正

以前『言語と文化』第四十三号（二〇二〇）に発表いたしました拙稿「『千家詩』所収作品の日本における紹介状況―七言の作品を中心に―」におきまして、石川忠久先生の御著書の書名を『漢詩鑑賞事典』とすべき所、誤って『漢詩鑑賞辞典』とし、略称も『鑑賞辞典』としてしまいました。ここに謹んでおわびし、訂正させていただきます。